

錯心於地球之外而後當能



之真景吾友得尾

天下蓋錯心於地球

之外者非邪歐物紀り告

成余雖未讀其書暫書所

自信卜豫言之當否云尔

明治二十一年二月於熱海客舍

厚知隈山題



序



國文日記之類彙集

唯紀貫之獨標榮

異密三千載  
及焉今此書出而紀  
氏遠巡歆避美其

所以然者豈可易

由言哉

丁亥臘月

敬宇中村道



古代乃志札が、  
昔翻古文此語、  
事か、  
七、  
夫、  
一、

考るに可きものなり。一 見取古  
書古文よりして往昔の事を知り  
から後人を知るを其の誠と不実と  
いふ事あり。今以て日記を三冊  
今此借談平語を以て其の事  
を其の事と見たり。其の事

とて海客より其の事

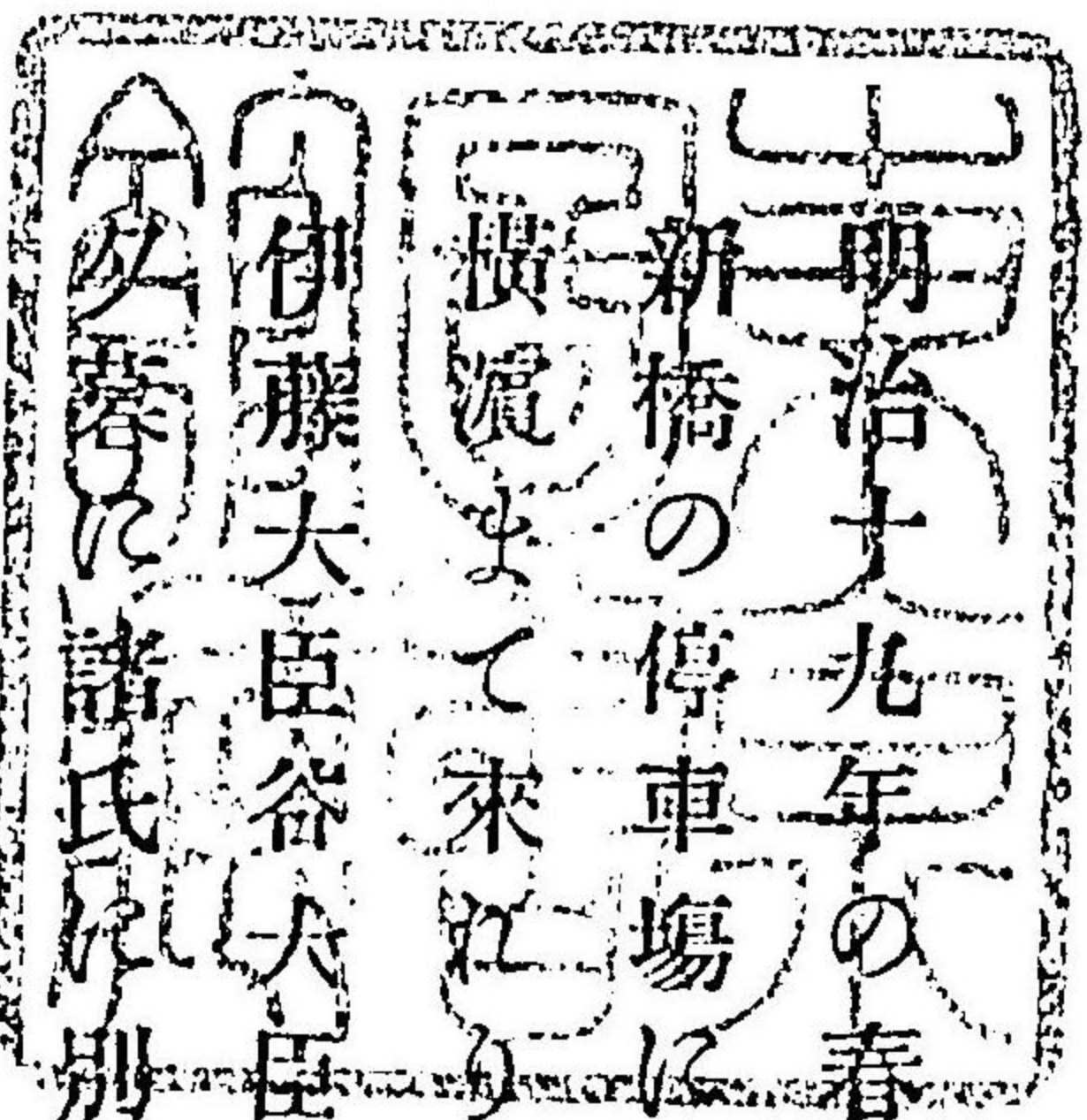
かくて其の事を知る

ありし海客の事

これ其の事なり

洋行日記

鳥尾 小彌太著



明治十九年の春 二月十二日麴町の邸を立いつ知れる人々  
新橋の停車場に集ひ來りて別れを告ぐ殊に親しき人々は  
横濱まで来た 即ち田中氏の待設けたる別荘にいささか  
伊藤大臣谷大臣其他の人々と暮を打物語あとしてあそぶ  
夕暮に諸氏は別れて高嶋氏の家に行く晩餐何くれと心盡  
のもてあし身内の人のことし主人留守あればとて内室の  
心つかひいとねんころあり心知る人々と物語して夜の更  
るもあらずやうく四時頃寝につく  
十三日 朝早く起出て船に乗る用意をあし朝餉を仕舞ふ

て出立とき鏡にむかひければ松波資之氏のよめる

かへり来てふた度君かうつすまてかくみの影の消す  
あらあん 返し

うつしおく心のかくみくもらすは千里の外に君を見  
るへし

人々おくりて船にいたる船ハ佛國の郵便船ヒオルガ號な  
り日出三竿錨を抜て港を發す

十四日 朝晴きのふの出船の後より我が部屋に入て寐て  
今日の九時ころ起出て見れば船ハはや紀の國の大嶋を  
すく夜の八時ころ神戸につく棧橋に迎ひの人々來りてね  
んころに悦ひをいふ調度取片付て船長に別れを告て歩行  
より光村氏の家にていたる主人と何くれ物語してこよひは

早く寝ぬ

十五日 二時の瀧車にて大坂にゆく藤田氏の高麗橋の家  
につく兼ての事あれとよろつの設けいとねんころなり知  
れる人々集ひ來てわけもあき事ともいひはやす妓女のと  
しよりたるか昔の事など語いて興するもおかし

十六日

十七日 雪降晝頃より造幣局炮兵工廠にゆくついでに美  
術會を見る日暮より明道協會の人々に招かれて銀波樓に  
いたるけふの寒さに心地あしければ早う歸ぬ夜半の頃よ  
り胸いたみいとく苦しければ兼ての持病あればさしおさ  
へて寝ぬ

十八日 心地おほわろく熱つよし人々打よりて見舞ふ醫

師を招き藥をすくめ看病いとねんころなり憶ふに過し一月の半はころ風の心地にて打ふし二月に入てやく心よければとて十二日といふ日を期して旅立の用意をさすにさほ常からされと七日頃より起出てをちこちの志るへ官大臣かたにいとま申にまかりて寒さ志のきにとて酒のみ勢ひめきて過しければ今は風の氣ハ去りて持病の留飲いたくおこりたる成けり兼ては船便を待て神戸より上海を経て香港へ行んとおもひ定めつれと何となく身軀のよわくくしう持病なれと常よりさやみつよく心もとあければそを思ひとくまりて今暫し保養を加へ直に香港に行んと決す十九日廿日廿一日廿二日廿三日打臥して保養す知れる人人かばりくく來りて見まふ

廿四日 北野の別業にいたる觀音堂建立の爲にとて書をかき此別業は山中氏の物なれと余か意に叶ひたれば得庵と名つけて吾ものかほにはからひたれば主も其意に任せてわか別業とよふ

難波かた生ふてふあしの上あからもかりて心の安き  
庵かゝ

廿五日 廿日會の人々に招かれて自由亭にいたる人々書を求む數紙に筆を揮ひて九時過る頃かへる

廿六日 大坂をたつ人々送りて梅田の停車場に來りて別れを告ぐ神戸まで見送る人々三五人と光村氏の家で宿る  
廿七日廿八日諏訪山の温泉に浴す

三月一日 午前十一時過佛國郵便船メンザレー號に乗る



船には横濱より乗組來りし中村加藤などいふ人々あり此  
 日日和うらくかにして海面に波瀾おし送る人々船まで集  
 ひ來て出船の頃棧橋にいつ船出やらねは一時ばかりも皆  
 々棧橋の上になくすむ船よりものそきて咄しをす船やう  
 やう動き出て棧橋をはある人々帽子を打ふりて見送る船  
 よりもおおしやうに名残を惜む次第々々に遠くあるまゝ  
 に人々立去るやうに見えねといつとなく影も見えすあり  
 め部屋に入て調度おと取片付て心をやすめて打ふす夕く  
 れ頃甲板に出て打望めは船ははや由良の戸を過て阿波の  
 沖を走る淡路嶋かすかにありて何となく心ほそし

おもひかね海原とはく見かへればかすみにもる淡  
 路嶋山

二日 小雨降晝頃日向の沖をすく霞て山を見す夕くれ近  
 くなりて大隅のみさきをめぐりて薩摩ふしを遠く望む雲  
 棚引て氣色いと物すこし沖のかたに種か嶋竹嶋硫黄かし  
 まおと見えかくれして風あらく波立さわく吾國の嶋山を  
 見るはけふをかきりとおもへは物かおしきことかきりな  
 し浪花に在し頃加嶋菱洲か平家を語るを聞し時康頼か歌  
 に薩广かた沖の小嶋にわれはありと親にはつけよやへの  
 塩かせこれをおもひ出てく

さつまかた沖の小しまをあとに見てゆききとかたれ  
 やへのしほ風

戀しといふ事はかくるをりにやいふへきなへて世にいふ  
 戀は物のかすあらす

三日 晴西北の風ふく茫々大海一片孤舟

芥子の中に入るとしきけは果もあき海もこころの影  
どこそ見れ

四日 きのふにおかし船長か三年こしに陸に上りてとま  
りけるに何とあくかはる心地して夜もすから寐られさり  
しあと語るを聞て

おのつから其世とあればおそろしき浪のまくらもふ  
しよかるらん

をりくく雨ふる神戸を出てよりやうくく暖かにありてけ  
ふは吾國の四月頃の心地す寒暖計十四度餘りあり夜に入  
て臺灣の瀬戸をすく

別れこし波路はるかに成にけり夢にも人の影うとき

まで

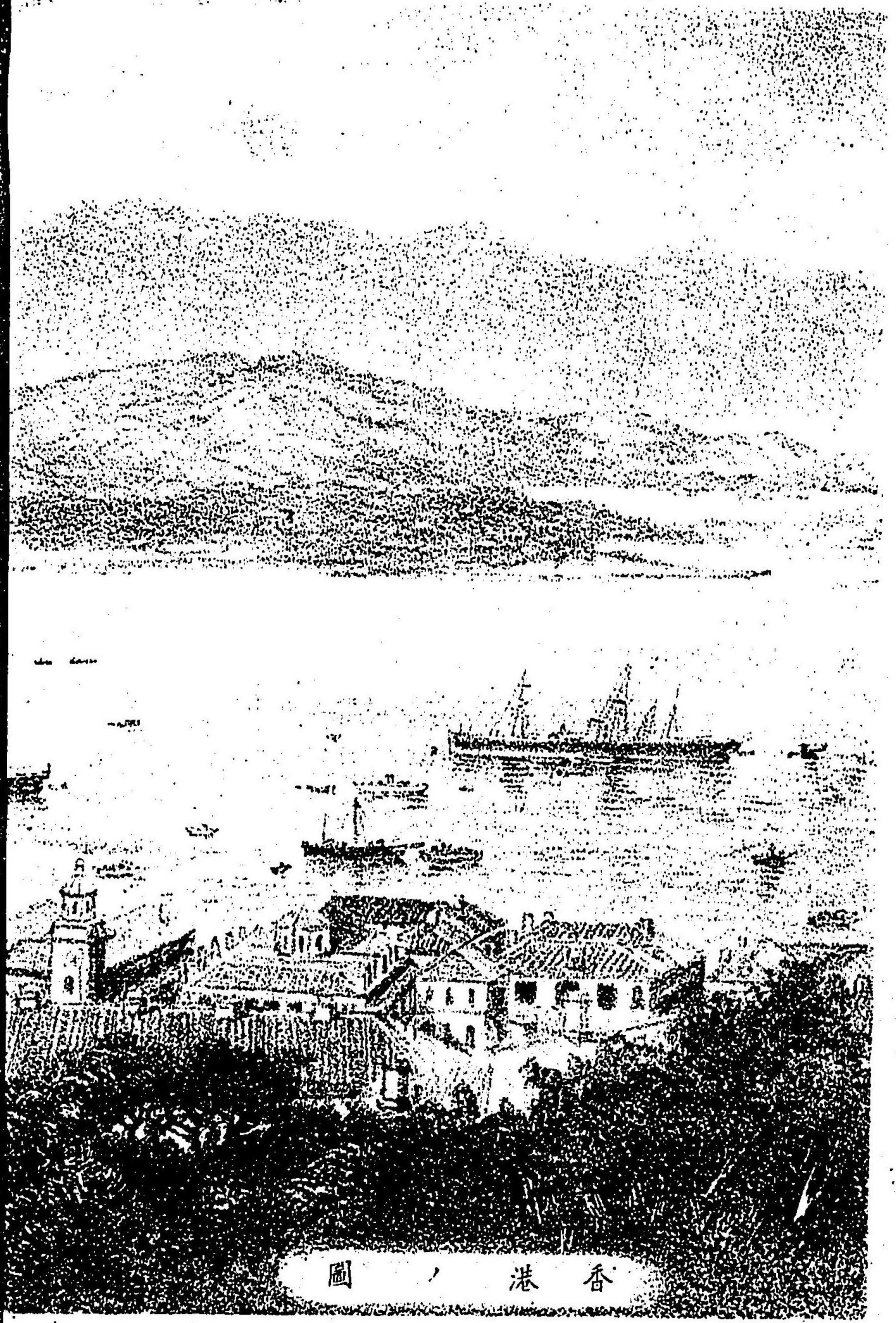
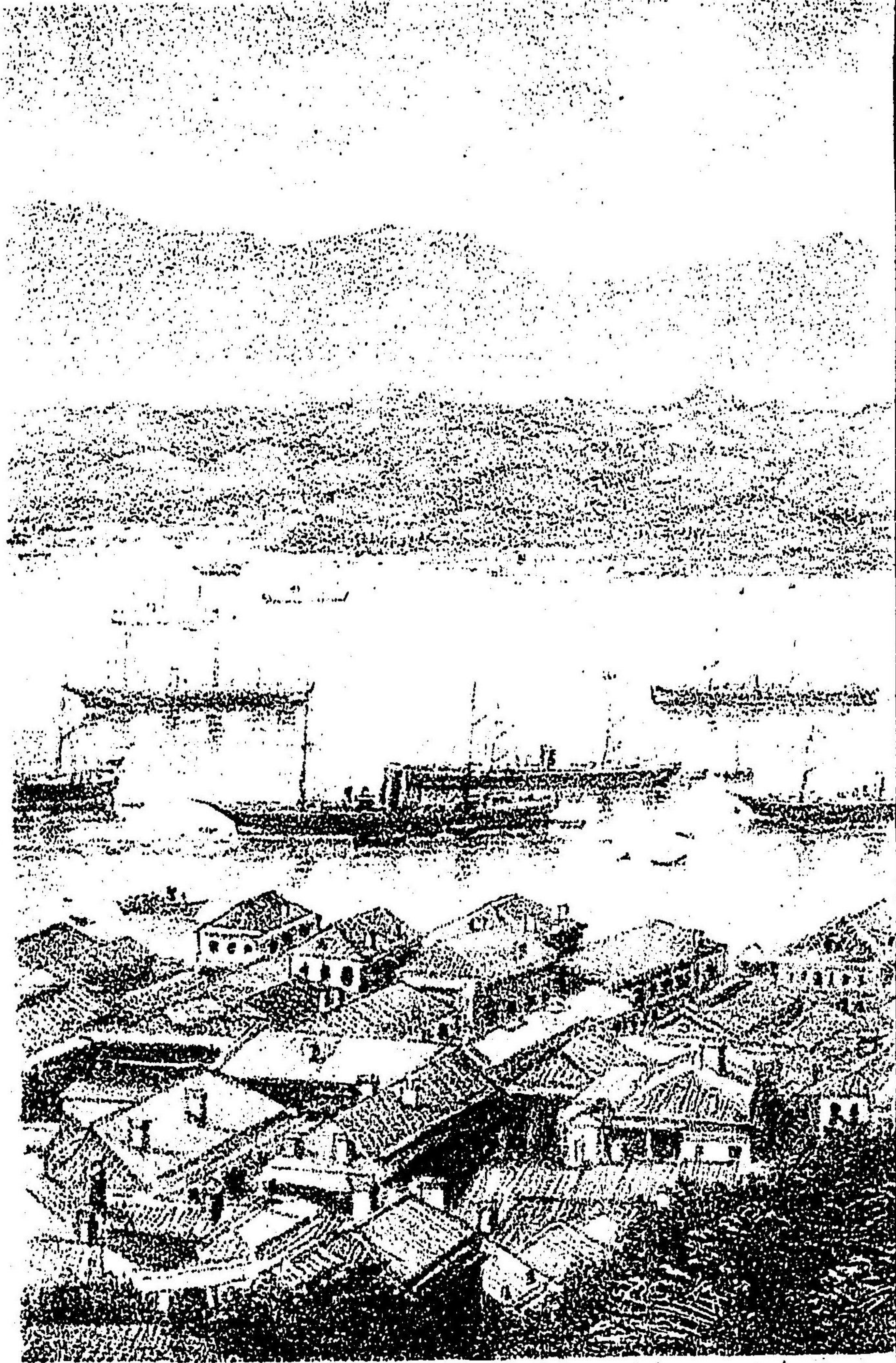
五日 晴けふもあは臺灣の瀬戸をゆく霞て見えす昔國姓  
爺鄭成功か此嶋によりて明朝の爲に力を盡しくことを思  
ひ出てく感慨ふかし午後一時の頃より遙かに支那の山を  
望む

六日 曇朝早く起出て見れば船は香港の瀬戸に入る氣色  
よき處ありさなから吾國の安藝備後の海に似たり嶋々の  
間を過る程に兩岸の氣色見るまにうつりかばりておも白  
し瀬戸の口より屈曲して二三里ばかりも過ぬれば嶋と陸  
との懷ろに大船つとひかくりて林をあす其嶋のかたを香  
港といふ水際より家屋立並ひて山の腰に打かさなりて見  
ゆ七時過頃錨をおろす支那人のはしけをおしつとひてせ

りあふさま吾國の横濱ふとにおあし只異なるは男女老少  
一船に打ましりて立働くありこれは一家ともに船に住め  
はあるへし八時ころ人々と打つれてはしけに乗波戸場に  
いたり歩行にて領事館にゆく領事南貞助氏は古くより相  
識る人あれば手を握りて互に無事を悦ぶ

浮雲の風のみにくくまかす身の千里の外にあふそう  
れしき

三井物産會社の人々來りて彼是と宿を心配して香港ホテ  
ルといふにいさあふ四階の上の部屋あれば階子をめぐり  
てのほるよ足も疲れて物うき心地す家のかまへ吾國にて  
はいまた見さるほどのものあれとあへて三階四階の家い  
らかを並へて建たれば此地にてはさのみ大厦ともおほえ



香港圖

すしはしやすみて文をしたくめて家におくる其端に書付  
ける

海やまをへたてくそしるへたてあきこころのうち  
見ゆるおも影

かたいどのよるへあき身はいたつらに袖に影そふ人  
あつかしも

七日 曇午後三時過より南氏にいさあはれて公園にゆく  
草も木も見なれぬいろにまけりあひてかはる境のし  
るきそのかあ

山の腰をはるか東に過て此處より港のうちを望む氣色い  
とよし

山はそひえ水は霞てみゆるかあ旅のうきそふゆふく

れの空

十二

日のくれより清輝艦に招かれて人々と打つれていたる夜の更るまで乗組の人々と物かたりすかゝる遠き國にまで軍艦の來て御國の御威稜をかゝやかす事のうれしければ日のみはた高くかゝけて仇まもる御船そ國の光ありける

八日 晴晝過るころより人々と山上にいたらんとて竹輿をやとひ腰打かけて何かの事とも語りつゝゆく支那人四人にて昇き山を登ること平地を走るかことし吾國の山駕籠おとよりは乗心地よし山上にいたればをちここに家屋ありて峯つゝきに道をつけたり商人おとの別荘と見ゆ山の最も高き處に簇を建て四方より船の來るを知する處あり

りこゝの眺望いはん方おし北の方は支那の陸地にして山々打つゝきて波濤の如く西南の方は嶋々見えてさあから畫に似たり此地昔は南越のはておれば唐宋の人も偏土とていやしみ嫌ひたればかゝる境のあらんとは誰か知るへき世うつり事變りて昔の鄙も今の都とあるためしにたかはすかく開けゆくは此地の幸といふへし山を下りて領事館にいたり日のくるゝ頃三井組の招きに赴き夜の十二時頃汽船に乗る此船も佛國の郵便船にてマクシウスと名づく大ききオルガおとよりは一倍もあるへしすへての構へ壯大あり

九日 曇朝早く起いつ港の氣色初めにかはらねと何となくゆかしき心地す支那人の物賣者多く來りて品々を甲板

十三

に打ひろげて商ふ又こゝより乗船する人ありて已かまに  
 まに小舟或ハ小蒸氣船に打乗て來る男女兒ども打交りて  
 一時は混雜いはんかたあし十二時ころより送りこし人々  
 別れを告てみあゝ船を下る中に親しきとちとみえて港  
 の出口まで小蒸氣船にて送るもあり又手拭あと打振て別  
 れを惜むあり人情いつくも同しおもむきあり港を出てま  
 はし嶋々の間を過るほど氣色れもしろし遙かに香港の山  
 を望むころは船の中物靜かにやう々大海の上に出たり  
 十日 晴朝早く起出てみるに四面山をみす氣候は吾國の  
 六月ころに似たり寒暖計二十六度海平かにして一點の波  
 瀾あし船長の心つかひやすからぬ事のありければ  
 大かたは心にたかひゆく船もうき世の中のためしあ

## るらむ

夜に入て暑いよゝつよし土用頃の夜におあし  
 十一日 快晴朝出て浴みして夏の衣を取出て着る午前九  
 時安南の山を右に見て過くけふは心地あしければ打臥ぬ  
 十二日 快晴朝起いつれば柴棍の河に入る岸には川柳の  
 如きものしけりて水に浸りたりさなから刀根川行徳あた  
 りのさまに似たり水浸々として流急からす船よりのそめ  
 は兩岸堤あく水田の中に所々人家あるをみる吾國の農家  
 のさまに似たり河の幅は四五丁もあるへく水深くして船  
 は岸近きまでよりて進む六十間もある大船のかくやすら  
 かに往來するは又奇といふへし暫くして横川に入ると見  
 えて川幅二三丁ほどにあり曲折すること甚しく忽ち西忽

ち東とめくりて進む程とはからぬ處に家屋烟突などの見ゆるは柴混府あるへしッヒそこにと思へと川の曲折多ければいと遠き心地す七時過る頃やうくくにつきぬ船を棧橋によせて繫く岸よりわつか十間ばかりあり人々と打つれて馬車を雇ひ市中を見廻り公園にいたる樹木のさまは香港より一しほかばりて見ゆ公園の中に動物園あり象虎蟒猿山猫駱駝其外鳥類も多くをりて見馴ぬもののみあり樹木は近き頃植たりと見えて大木はあし椰子檳榔子あて見事に生ひ茂りたり此日の暑は五月晴の甚しきか如く堪ふへからす總して市中の趣は香港などに及ばさること遠し商人ハ洋人支那人あて軒をつらねたれど盡く見るに足らず極めて陋劣あり安南人は多く馬丁船丁あての賤業を

とる顔かたち吾國人に似たれど氣風柔弱にして男子もさながら婦人の如し骨格もきはめて短弱なり

人の國の亡ひし跡を來て見れば草木のいろも物あはれあり

十三日 曇朝七時錨を抜く曲折して河を下り十一時頃サングツクといふ處にいたる柴棍河の海に注く處灣をあし其東北に突出たる山岬をいふ兩山双角のことく其中間僅かに平地あり山の尾に添ひて樹木生ひ茂りて家屋まはらに氣色よき處あり吾國を立出しより始終大海を過ればたまたま山水樹林のあるを見れば心嬉しく打詠め吾國にもかかる處ありあておもふあり兎角するうち船は大洋に乗出て水天渺々微瀾織るか如し寒暖計二十六度けふも心地



あしければ打臥す

十四日 快晴風涼しく初夏の心地す寒暖計二十九度けふは少し心地よし

打ふして青海原を見渡せば水のかきりは雲のやへかき

十五日 快晴朝七時ころ新嘉坡の瀬戸に向ふ左の方に嶋見ゆ山とてはあし小高き岡打續くと見えてさあから帯を引つらねたるか如し遠近ありて濃淡おのつから分れていまた見馴ぬ氣色あり漸くにして港に入る小嶋重りて川にも入るかど覺えし船を棧橋につかく頃は八時を過たり吾國の郵便汽船會社の遠江丸も同じ棧橋に在りこれは歐洲より日本へ歸るもの成へしいとあつかしくおほゆ寒暖計



新嘉坡の風景

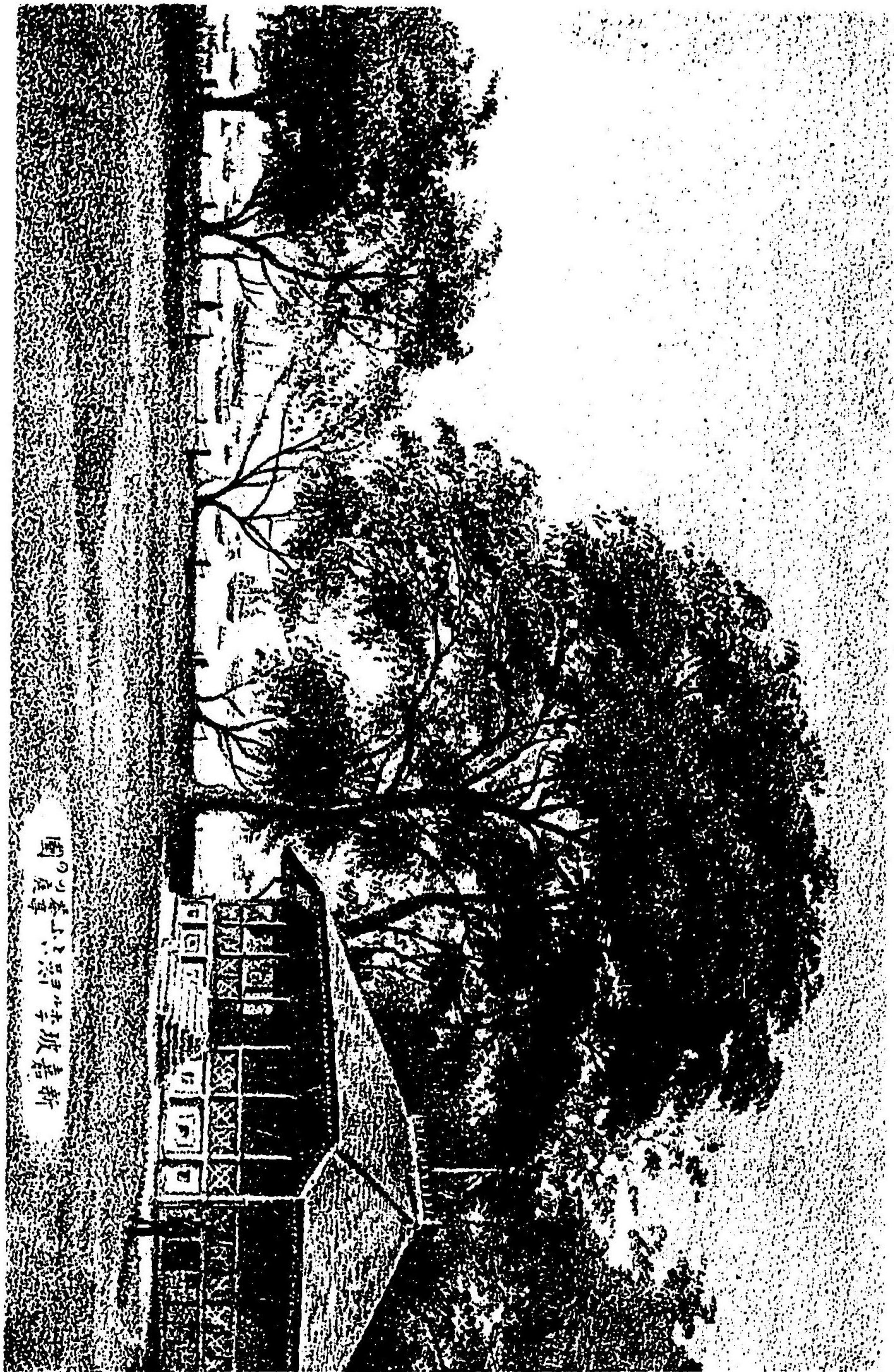
あしければ打臥す

十四日 快晴風涼しく初夏の心地す寒暖計二十九度けふは少し心地よし

打ふして青海原を見渡せば水のかきりは雲のやへかき

十五日 快晴朝七時ころ新嘉坡の瀬戸に向ふ左の方に嶋見の山とてはふし小高き岡打續くと見えてさあから帯を引つらねたるか如し遠近ありて濃淡おのつから分れていまた見馴ぬ氣色あり漸くにして港に入る小嶋重りて川にも入るかど覺えし船を棧橋につあく頃は八時を過たり吾國の郵便汽船會社の遠江丸も同じ棧橋に在りこれは歐洲より日本へ歸るもの成へしいとあつかしくおほゆ寒暖計

三十一



新嘉坡の風景

二十九度暑いやまして堪かたし陸に行て涼しき處を求め  
てまはしやすまんとて例の馬車を雇ひて行く土人のさも  
あらあらしきをのこ馬を御するに打たゝきて走るさまい  
さましくもまたあやふし船のつきし處は本港の西南のか  
た小山のうしろにあり石炭積入るゝ場所ありとそ故に市  
中に出るには凡二十丁斗りもあらん此處潮來れば海とあ  
り潮されは瀉となる處にて入沼のたくひありかゝる潮の  
中に樹木の生ひ育つはいとあやしまはらくして市に入る  
支那人の店軒をつらねて陋隘あるもあり奇麗なるもあり  
て大よう繁昌の有様あり市中を行く事程ありてホテル歐  
羅巴といふに至り車を止む廣き家のかげ離れたるに入ぬ  
此處は玉つきかどする處あり二方打開きて涼し腰打かけ

てやすらふほどに暑はかばらされど此處は海邊にのそみて港の氣色も居をかからに見えかつ樹木覆ひて風吹通し何となく心地よけれどけふの午後の四時より船出るとききは長居もならずそれに歸るさ公園も見んどおもへはいそき車に乗る東北とおもふ方に馳行く歐人の住居多し家居もまばらにて道の氣色よし樹木の緑に茂れるに紅紫あとの花の咲たる竹林のさま殊にめつらかあり商人の莊園と見えて處々に門あり家居は遙か樹林のあなたにそひえたるいと趣きわりかゝるきりから白雨ふり出て一まきり道も見分かぬばかりありまさしも暑かりし日の頓に涼しく成て旅の疲れも忘れたり

世の中にかゝるためしもありと知れぬれて嬉しき夕

### 立の雨

公園に至れども路わろければとて入らす車を歸しとことども忘れぬ谷間木の間を經廻りて船に歸る

深緑まばらに花の咲いて、見も習はさる道そゆかし  
き

此土地のいやしき者の子供小さき舟に乗來りて物を乞ふ人々五錢十錢の白かねを海に打あけやれば三五人飛ひ入る其さま蛙の水を潜るか如く姑くしてうかみ出つ必らず拾ひ得て失ふことおし何やらん口々にいひて手にて打まねく四時ころ船いつ瀬戸のいとせまき處をくねりてすく氣色よしまばらくは小嶋居並ひて水海の中をゆくか如し嶋々の打に海水に浸りて木々の緑のまけりたるは山の低

ければ河の洲おとに蘆かやの茂れるに似たりきしを飛ひ  
はかれて水の中に大木のほつくと立るは宛あから洪水の  
田園樹林を浸せるか如し

十六日 曇雨あり寒暖計二十九度晝の頃は三十二度大海  
中に小嶋ありシロジャバと名つくかたち相摸の江の嶋に  
似たり樹木鬱葱として遠く望めは神仙の岩室かと疑はる  
十七日 晴午時寒暖計三十度ロンドーの瀬戸をすく右は  
即ちロンドー嶋にして左はスモダラのみさきなり嶋は周  
圍二三里もあるへし山勢甚たするとく樹木茂りて新嘉坡  
あたりの嶋々とは氣色更に異あり左の方は全くスモダラ  
の極西端にして遙かに山々打連りて雲間にそひえたり香  
港を出てよりかくる洪大ある山水の氣色を見ず海邊の趣

きは恰も讚州高松邊の如く山は海につき出てく内懐ろ廣  
く平らかあるあたりに松原と見ゆるは椰子の樹あるへし  
處々に烟の立なひきたるは人家あるへし岬の頭に燈明臺  
あり

村雲のかくる影たにあかりけり夕日まはゆきスモダ  
ラの山

シヤムの人新嘉坡より乗組て在り王族のよし顔かたちい  
やしけかり婦人三人はかりと小兒を具したり男子は西洋  
服をきたり婦人のよそはひは國風にやいとあやしき筒袖  
の白き繻絆とも見ゆるを着て裳には湯卷のやうなるもの  
をまとひぬ模様は吾國の更紗の風呂敷に似たり左の肩よ  
り右の脇へ斜めに薄き結をうち卷て髪はうしろにあてつ

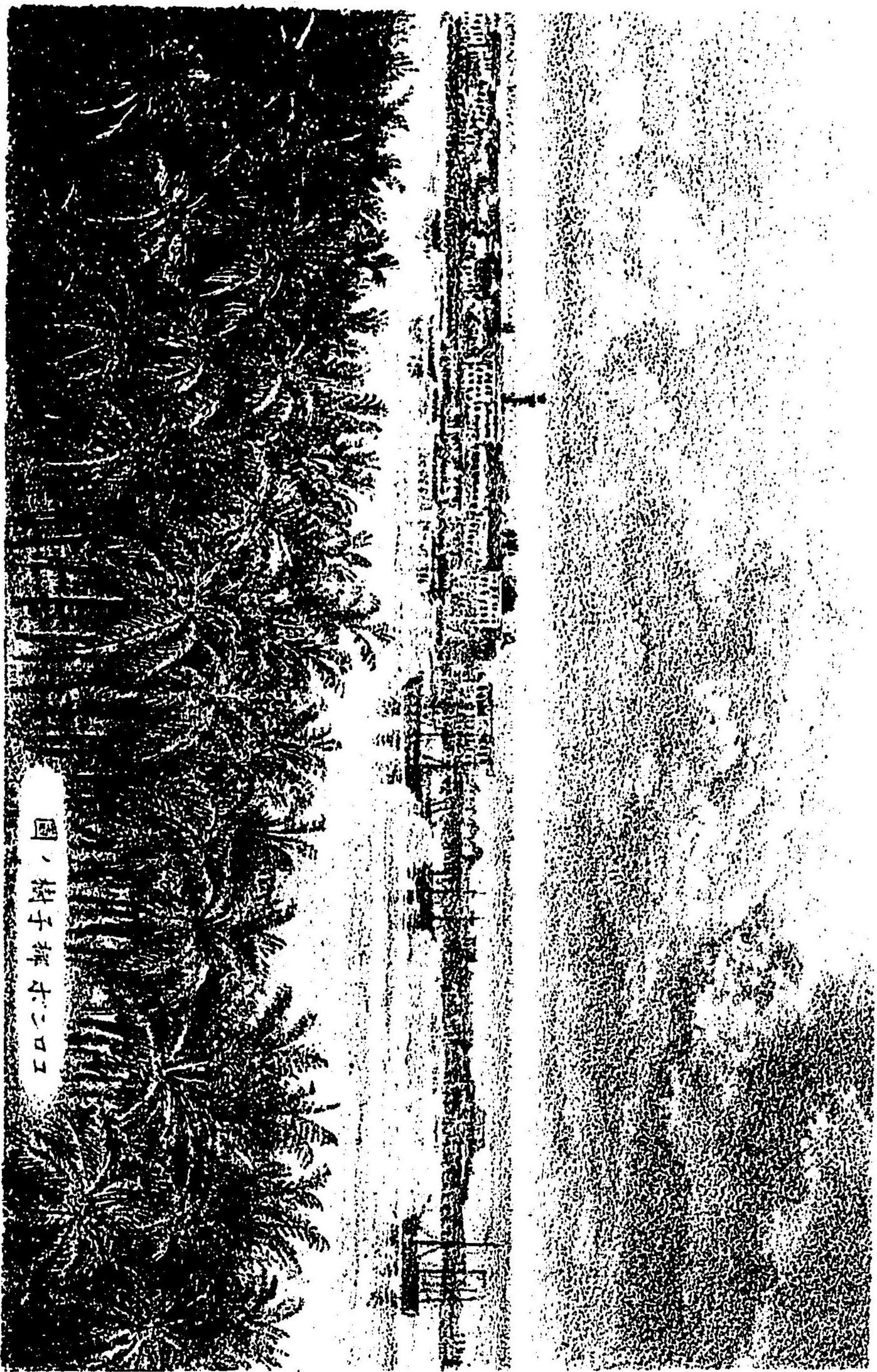
けて襟のほどより切たれば吾國の未亡人の撫髮におかし  
 かく髮おとには飾もあけれど寶石多き國と見えて耳環指  
 環にいと見事ある金剛石を飾たるはものゝ釣合ぬ心地す  
 十八日 晴朝寒暖計三十度午時も同じけふは朝より頭痛  
 におやみて打臥す林子平の父兄訓をよむ人々必ず一讀す  
 へき書あり船中歐洲人の乗組凡そ五六十人も有へし其中  
 婦人十人餘五六歳より十歳ばかりの子供八九人はかりを  
 り朝早くより甲板に出て狂ひ遊ふさまいとまめくくし婦  
 人は書をよむあり手仕事するあり子供に物教ふるありす  
 へて物靜におとなしく見ゆ吾國の開化めきてはねまはる  
 婦女子の態にあらずされど柔弱の態あくおのつから守る  
 所ありと見えて上品ありけふは浪ありて船少しく動揺す

るを覺ゆ香港を出てより風波の荒き日とては一日もあし  
 恰も油の海をぬめり行くか如しけふなども風はなけれど  
 大洋あればおのつから水のうねり高きにや  
 十九日 晴寒暖計二十九度あまりあり此頃は二十九度よ  
 り三十度前後にて夜晝のたかひあければいと堪かたし昨  
 夜寐られさりし疲れにやこよひは早くより寐る二時頃眠  
 覺たれば甲板に出て月を見る満船物靜にて波の音たうた  
 うたり

大空にすみわたりけり別れこしわかふるさとの春の  
 夜の月

二十日 晴朝二十八度涼し右の方錫蘭嶋を望む遠山波濤  
 の如し船行くに隨ひて山を見ず海岸の一帶霞て見ゆるは

平原あるへし午前十一時頃コロンの港に入る氣色よし  
 とも覺えず港の入口に大石をたぐみて波除を築きたり長  
 さ八九丁もあらんこゝは船を陸より四五丁隔て、錨を下  
 す土人のほし舟をこきて來るもの香港などの如くいどさ  
 わかし其舟の形ち一種異様なり幅せまき事漸く人一人腰  
 打かくるほどにして長さは四尋より五尋もあらん舟底は  
 少しふくらみて深さはふかし横に七八尺ばかりの腕木を  
 二本さし出して其先に大木を結ひ付て水に浮けたり此木  
 の釣合にてくつかへらさるものと見ゆ少し沖合に釣など  
 するを見るにみか此舟のつくりさまあり港は西向あり其  
 南の方ぱり出て、灣の形ちをなすこゝに商館あとを立つ  
 らねたり夫より東北の方は一帶の松原の打續くと見ゆる



國、松原の港の入り口

は椰子の林なりかく椰子の多く茂るはこれまてに見す東  
京を出るきりに釋の雲照和上よりゴールといふ所のグチ  
ラト子といふ人を尋ねくれよとて文を托せられたればこ  
ゝに來りて案内をする者に問ひければゴールは他の港の  
名にてこれより四十里もあらんかといふさればこゝの佛  
寺に名高き僧のおはすやと聞きければ大よそ港より三十  
丁かほとも離れて英佛の詞にも通せし高僧おはすよしを  
こたふさらば其僧にまゑて法の事とも聞かんとて人々  
と打つれて小蒸瀨船に乗て陸にのほり車をやとひて案内  
するものにいさあはれてゆく道のほど三丁かほとは家立  
つゝき大よう繁昌に見ゆそれより湖水のかたへに添ひて  
道あり氣色打かはりて心地よし湖水の廣さは見わたした



る所縦横十四五丁もあらん岸には雜樹れひ茂り近き磯は  
 緑の色を水に浸し遠きは霞て其趣きよし中に小嶋いくつ  
 もあり小蒸瀨船などの走りちかふさまれもしろしやうや  
 うゆくほどに左にくねりて土人の家居ある處をすく樹木  
 まばらに歐人の莊園とも見るへきもの左右にあり低き岡  
 きのはるやうかりかやうの處を過るほどに馬車を引どめ  
 て此處なりといふ見れば寺院ともおほえぬ家二三軒はか  
 り一つくるわと見ゆるうちにあり門とてはあく木にて四  
 尺ばかりの犬よけの如きものを戸とす案内する者に付て  
 入れは煉瓦石にて作りたる中央の家にいさかふ二階に登  
 れば卓子腰かけかともありて悉く西洋の品と見ゆ駟馬沙  
 彌ともいふへきもの四五人出來りてめつらしげに取圍て

立てり袈裟ハ吾國の律僧のかけたるものと同しく色は黃  
 かり裸躰にこれをつけて右の肩をあらはしたるは畫にか  
 ける羅漢の像とことあることかし机の上に日本板の瑜珈  
 課誦下の巻と阿笈羅帖五の一卷あり傳來を尋ぬれば過し  
 頃日本の人持來て置しよしをいふ暫くして老僧出來る年  
 の頃七十餘り身躰肥大にして顔色たくましくさすかに此  
 土の智識と覺えたり名札を出して事の上しを告れば老僧  
 の曰くグテラトテは吾弟子なりと雲照和上より頼まれた  
 る法の事とも聞きければ英佛の詞もよくは通しかたけれ  
 はやみぬ老僧の名はマンガラーといふ別れて立出れば案  
 内する者小さき辻堂めきたる處にいさかふ入て見れば佛  
 の涅槃像を安置せり白蠟石を以てきさむ製作いと拙し臂

き立て枕とし目を見はりて佛像にも似すさらに殊勝の姿  
 かしされど北頭西面に安置して種々の花を御前に多く蒔  
 散らしたるはさすがに詣つる人のあるにや

北まくら西のおもては三つの世にかはらぬ君かすか  
 た成らん

そこくくは門を出て車に打乗もと來し道より歸る彼の湖  
 水の傍らを過るほとは道を隔てて蓮池ありもはや葉を出  
 して一面に青みわたりて見ゆ案内する者にきけは今より  
 三ヶ月を過れば花開くよしをいふされは吾國の六月頃成  
 へし時候の替りたる土地あればさもあらん此國は南天竺  
 の極南に在て大陸とは一水を隔たる島あり佛の經に所謂  
 楞伽山とは此國の事なるよし聞つたへたり楞伽とは不可

往の義ありとそ昔は福德最も勝れし神仙などにあらされ  
 は往く事叶はさりきとなん佛在世に此國にいまして大慧  
 のために楞伽經を説き玉ふに凡夫の輩はその法會に參る  
 ると能はさりきとかや世の中降行くまくに人の徳おとろ  
 へて智を競ひ利を争ひ水火の力を以て神通にかへ遂ひに  
 かゝるめてたき國をも踏あらしして今は尋常の者といへど  
 も利の爲に命をも抛つほどの者にあらされは住馴ぬへく  
 もあらず成にたり吾國も古往は唐土より神仙の靈地とも  
 いひ傳へて此上あくうらやみて秦の始皇帝ハ徐福といふ  
 人をおこして不老不死の藥を求めたといふけに有かたき  
 國ありきされは國土は人の業力によりて移りかはりゆく  
 ものなれば人の徳れとろへ利をのみ争ふに至ればいかか

る勝境も忽ち穢土と變すへし松島の松を切て薪とし和歌の浦の潟を埋めて盤やく處とするも其時の人心にはよき事と思ふあるへし

けふも暑つよくまはらくホテルに入てやすむ商人の此土の産物寶石などを携へ來てひたつらすくむれと大かたは見し事あき品にて價のほども志られねはかふり打ふりていかむもいと本意あき心地す三時過る頃船に歸る七時船錨を抜く夜食すまして甲板に出れば月いまた出すほのくらきにコロンボの港の燈明はるかにかくやきてものさひしき心地す

二十一日 晴寒暖計三十度朝より風あり波はたちたりとも見えねと船少しうこくやうに覺ゆ夕くれちかくありて

海のつら鏡の如く一點の波瀾なし日の沈むころは西のそら紫に紅の色を染出てく雲にうつり水に映してさかから錦の如く佛の西方に極樂國ありと説き示し玉ひしはかゝる氣色をまのあたり見て人の心にさもありあんと思ふなればにや

二十二日 朝二十九度午後二時ころ三十一度暑つよし

二十三日 晴朝二十八度

二十四日 朝二十八度午後三十度

二十五日 晴朝二十七度午後三十度午後三時頃よりスコトラ島を左に見て行く全山少しも草木かく山骨あらはれ出て誠に奇怪のさまなり巖石の色は赤黒く古き竈あどの崩れたる焼土の如し地獄といへる國あとはかくもありあ

んどおほゆ船は一里餘を隔てて過れば其さまあさやかに見えていとおそろしかゝる處にもすむ人ありて其數六七百人もありといふもと海賊どもののかれ來りて住移りしものくよし島の流れ大よそ五十里ほどもありて其幅三十里に下らすされと水は島中に唯一ヶ所湧出るよし航海の便よりいはく誠によき處なれと餘りに惡土なればさすかの洋人も捨おく成へし船少しはあるれば遙かに嶮山の峨峨として雲を凌きたる一しほの趣きあり唐畫の山水などにあるへきさまあり

二十六日 晴朝二十六度午後二十九度曉早く起出て甲板より見わたせば在明の月一人残りてつれなきさましたるいとあはれあり

有明の月影しろく波さえてふねうつおともすくしかりけり

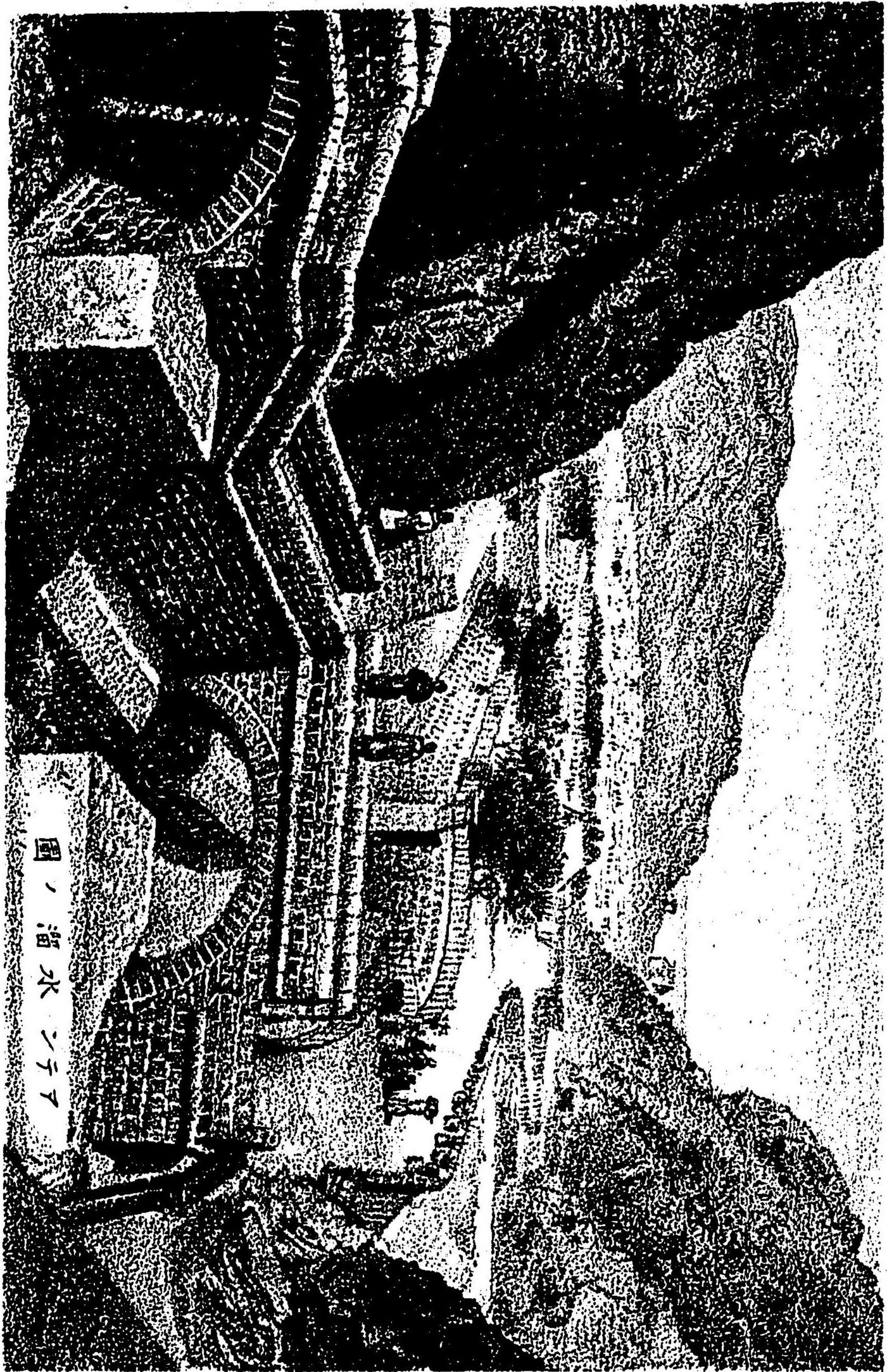
二十七日 晴朝二十七度七時頃ばるかにアデンの山を望む船やうくくにすくみて朝餉を仕まふころ港に入る港の西北の方は海にづらありて遠く亞刺比亞の諸山をひかへ烟霞渺々として景色模糊たりアデンの山は港の東にそひえて巉巖峨々として草木あく其様あたかも古屋谷の盆石を海面に並へたるかとし島の東北さし出たる處より一帯の砂洲ありて陸地につくくこれを望むに汀を見す又港の眞西に一島ありアデン島よりは小さく其姿ハ似されども盆石の見立はかほることあしさればアデンの港は東と西に島ありて東北にかけて砂漠を引廻らし南の一面打開

きて大海に臨む船は島の波戸場ある處より十町ばかり隔て、錨を下す此島の名高き水溜め見んとて十一時頃人々と打つれて陸に上り車にのりて行く此處の土人もあらあらしく馬を打たきて御す磯邊の道を北東にさして行く程に山の尾の上あかく海に張出たる處をくねりてのはる此處に古城と見えて巉巖の間に石を疊みて塀とあし唐畫にも有へきさまに處々やくらめきたるものも見ゆ峠に至れば山を切おとして通路を開きたり此城升形のやうの造りさまにて門を構へ中にいとふるめかしき大炮二三つを居たれどこれを守る人とはあし此處を過れば廣き山懷ろに出つ下り路に七八丁かほともゆくに市ありて家屋立並ひ顯然たる一府をふせりこれそアデンのもと市ある東

の方海に面して港ありされどせまければ大船つとふへき便あしく故に今の西南の港を以て本港とあしたりといふ馬車を馳て北の方より南をさし人家の中を過て山の麓に到れば所謂名高き水溜の處あり車より下り歩いて石壇をはるこくらはは樹木を多く植付たりされど日々水を汲てこれにそくきやうやくかれさるまてあれば林をあすには至りかたかるへし水溜の處は山けはしく谷切り立たるか如く其谷の口廣さ十間ばかりの處を切石もて堤を築きその中は漆喰ひもて塗り固め廣さ一反ばかりのもの二つありて水を貯へたり其れくにいたれば小さき水溜の幾つもありて谷より流るゝ雨水を留めて次の大なる水溜におくるものと見ゆ今は水涸れて一滴もあし谷口より奥行六七

十間もあらん廣さは三十間ばかり漸々にあちまひりて形も長三角をなす此處に來しころは空に雲かゝりて日を遮り海上より吹來る風涼しく凌きよし寒暖計は三十度五分見めぐり果て歸には市中を見んかどかたらひて馬車に乗る馭者に其よし告れば法外に金をくれいといふ皆々腹を立て、もと來し道より歸る大よそ見わたしたる處にては暑を凌きて見るへき甲斐なき處と覺ゆ馬車の通りし處はことごとく土人の住居にていときたかく歐人の止住する者も多くあらざるにや大厦と見ゆるものは見えす船に歸し頃は南の風吹いて涼しきこといはんかたかし此地は名におへる暑のつよき處なれど此度は却てコロンボなどよりは凌きよきやうに覺ゆ土人の子ども小さき舟に乗來て

圖四六



圖、新水、シテム

錢を乞ふこと新嘉坡にかはる事なし船より食の餘などを  
取捨れば魚多く集り來る同行の人々手々に釣針を投すれ  
ば四寸ばかりの鯖のやうある魚釣にかゝるかもめの波間  
に心やすけに見ゆるは吾國のものとかはるることあし

海士の子かたからわらそふ波の上に眠るかもめのう  
ら安けある

夜の八時ころ船を出すこれより紅海に入る

二十八日 晴雲あり寒暖計二十八度西北の風吹出てゝ波  
立さわく佛經に説置れし外境界風飄蕩心海識浪不斷とい  
ふ意を思ひ出てゝ

風ふけはあたに立そふ沖つ波のよるへなきこそかあ  
しかりけれ

一時過る頃ペリームといふ島をすく亞弗利加の中ありと  
 そ小島幾つもつらありて氣色よし山の形ちアデンかどく  
 は打かばりてけはしからす樹木はあけれと草は生ふと見  
 えて青く黒みて見ゆ磯邊に難破せし船二艘あり帆柱打を  
 れて斜めに傾き半は海に沈みたるいと哀かりかくる遠き  
 島根にてかくる憂目にあはんは苦しき極みあるへし午後  
 二十九度

二十九日 晴雲あり朝二十七度風吹こと昨日に同じ

三十日 快晴朝二十五度涼しき事秋の日の如し午後二十  
 七度はかり紅海は風あき所にてたまくと吹來るは亞弗利  
 加亞刺比亞の沙漠を過し熱風あれば肌にふれて心地よか  
 らさるよし聞きりしに此度はいと涼しく風さへつよし

是は常ならぬ事にや夜は二十三度位あるへし

三十一日 晴朝二十四度けふは風吹つのでりて波大あり船  
 の動揺すること吾國を出てより例しあし午後三時ころよ  
 りやうくとくに風よわり波も低くなりゆく五時の頃兄弟島  
 を左に見てゆく島は至て小さし周り三四丁もわらんかさ  
 うすき挽臼を二つ並へおきたるかことし其二十丁ばかり  
 西の方に在りて少し大なるは兄島あるへし此處に燈明臺  
 あり煙突高くそひえたり亞弗利加の山遙に西南のかたに  
 つらかり夕陽まづみ殘霞雲に映し遠山の氣色鋸の齒の如  
 くにておもしろし

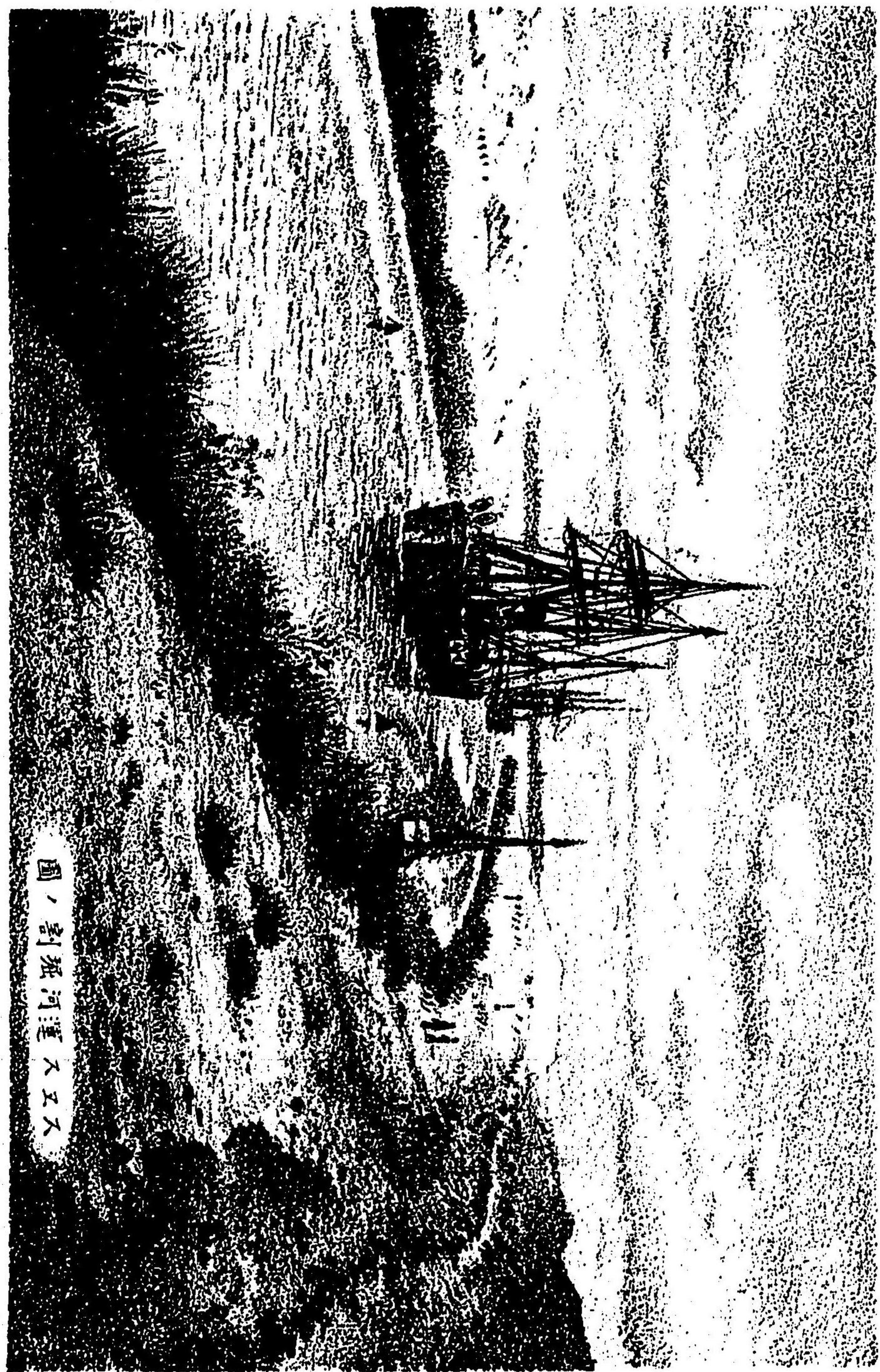
四月一日 晴朝十八度肌寒し亞刺比亞と亞弗利加の山を  
 東西に望む其間四五里もあるへし紅海も行つくし午後一



時頃スエスの港を煙波漂渺の間に見る兩岸せまりて二里  
斗り山はことごとく銅色にはけ顯はれて裾野より海よか  
けて一帯の沙漠と見ゆ此日風あく波靜かにして盪の中を  
行くか如し二時過る頃港の沖に錨をおろす

波あらしき八重のしほ路を渡り來て海のすゑすの浦の  
夕あき

スエスの港は遠淺なれば船の錨をれろす處は陸より一里  
ばかりもあらん遙かに家屋の立つらかりたるを望む其さ  
まさのみ繁昌の地とも見えす例のこと土人の物賣に來る  
者多く大概は埃及人にしてこれまでに見し印度かどの人  
よりは人品よく見ゆ四時ころ船進みて堀割に入る堀口は  
港の東に在りて波戸を海中に築出し其鼻に家屋もあり見



圖五九

るかまゝにさすかに大作事と覺ゆ暫く進めば其幅せまりて三四十間はかりなり船の行くこと犬のはしるほとにてはやからす兩岸は掘取し土を積たれば見渡しあしされど折々低き處より望めば一面の沙漠にして沙の山波濤の如し風に吹立られてかやうに成たるものあるへし夕餉きたむる折ふし食堂の人々俄かに立さわき甲板に走りいついかある事の出来るかと思ひて立出て見れば他の船三艘堀のかたへによせて繋けり其中に佛國の兵隊を乗せてあるはことごとく甲板にいてゝ音樂を奏すわか邦便船の無事に過るを祝ふ成へし人々帽子手拭あと打振て會釋するさまいといさましけあり折しも四十餘の婦人予に向ひ目に涙をふくみうれしけに何やらん打語る語通せされば心

苦しくも首もてうかつき居たりけるほどに同行の太田氏  
來りて何か互に語らふ後にきけばわか兄弟の安南の國東  
京に行ものよしを告るにてありきわか兄弟とは同國の  
人を親みていふ心あるへし歐洲の婦人の軍事をよそこと  
にせず勇むさまを志るに足る夜の七時頃船をどくめて今  
宵はは溝中に泊す

二日 朝十八度曉五時ころより船をやる夕はいと寒き心  
地す寒暖計十六度に降り九時過る頃船湖水に入る湖水  
の廣さ流れ十里幅二里あまり岸に樹木かく打見るに心地  
はるれと氣色はよしとも覺えす一時ほどにて又も堀に入  
る十二時ころ湖水をすく西の方に村落ありイスマイヤと  
いふ樹木も見ゆれと色黒み何とかくよわりたるやうに見

ゆ此處に埃及王の離宮やうのものありけふは天氣うら  
かにして風かく氣候も日かたに脊をあたくめて心地よし  
かねて紅海の熱風堀割の塵沙ときけはいとく苦しき事と  
思ひ居たるに此度は聞しにたかひかく難かく打過るは我  
我同行の幸あり船に勤むる人の二十八度はかり航海せし  
に紅海にて冬着を着替へかく涼しく堀割を過るは今か初  
めてありと語りき夕四時頃左の方堤を隔てく海を望む渺  
渺として際限あしこの處はメンザレーと名付る瀉ありわ  
さければ船をやること能はずこれにそひて二十里ばかり  
を過ればホルサイドに至る頃は夜の九時ありきホルサイ  
ドは地中海に出づる堀割の口に在り堀割の工事出來しよ  
り取設けし港にして追々繁華になりゆき歐洲諸國よりも

出稼人多く來住す船の着しは夜中あれば土地のありさまは見る事能はず船は岸より三十間ばかり隔てゝつなく人々と打つれて陸に行んとてはし舟をやとひ波戸場より歩行にて行ほとに物賣家より人出て來て何やらんいひもて袖ひかん斗にあとに付添來るは物買ふ事を勸むるあるへしいどうるさし西洋の手踊狂言めきたるものわりとて人々と打つれて入る廣き家に瓦斯の燈火多くともしてきらきらしく正面に舞臺あり高さ四尺ばかり其まへに音楽を奏するもの男女左右に七八人はかり居並ふ音調は賤しけかり物識る人にきかせあは亡國の音ともいふへきか浮而嶮ありされど旅のうさをやるには却てよし暫くして役者めきたる者出來るこれも男あり女あり高らかに唱ふ一曲

奏し終れば見物の人々手打鳴し沓もて板間をたたく響る心なるへし殊にれかしく覺えしは一人のをのこ高帽子に小禮服を着手眞似身振などあしつゝ何やらんかたり出つ聲に高下ハわれど曲折あければ歌うたふとも覺えす其さま吾國の開化めきたる人のそふりに似て興ありこれも物まねのたぐひなるへし吾國を出てより一船の中に一月ばかりを過し暑にあやみて心元あきたまゝ港に入るも見るものきくもの何とあけうき事のつもりて今ははかくしき氣心もあしかくるをりにかやうのあてやかあるものを見物するは實に保養にもあれりと覺ゆ十一時頃船に歸る十二時過より船出るときけと寐て知らず

三日 晴朝二十度けふも日和うらくかに空打霞て春の日

の心地す午後二十二度

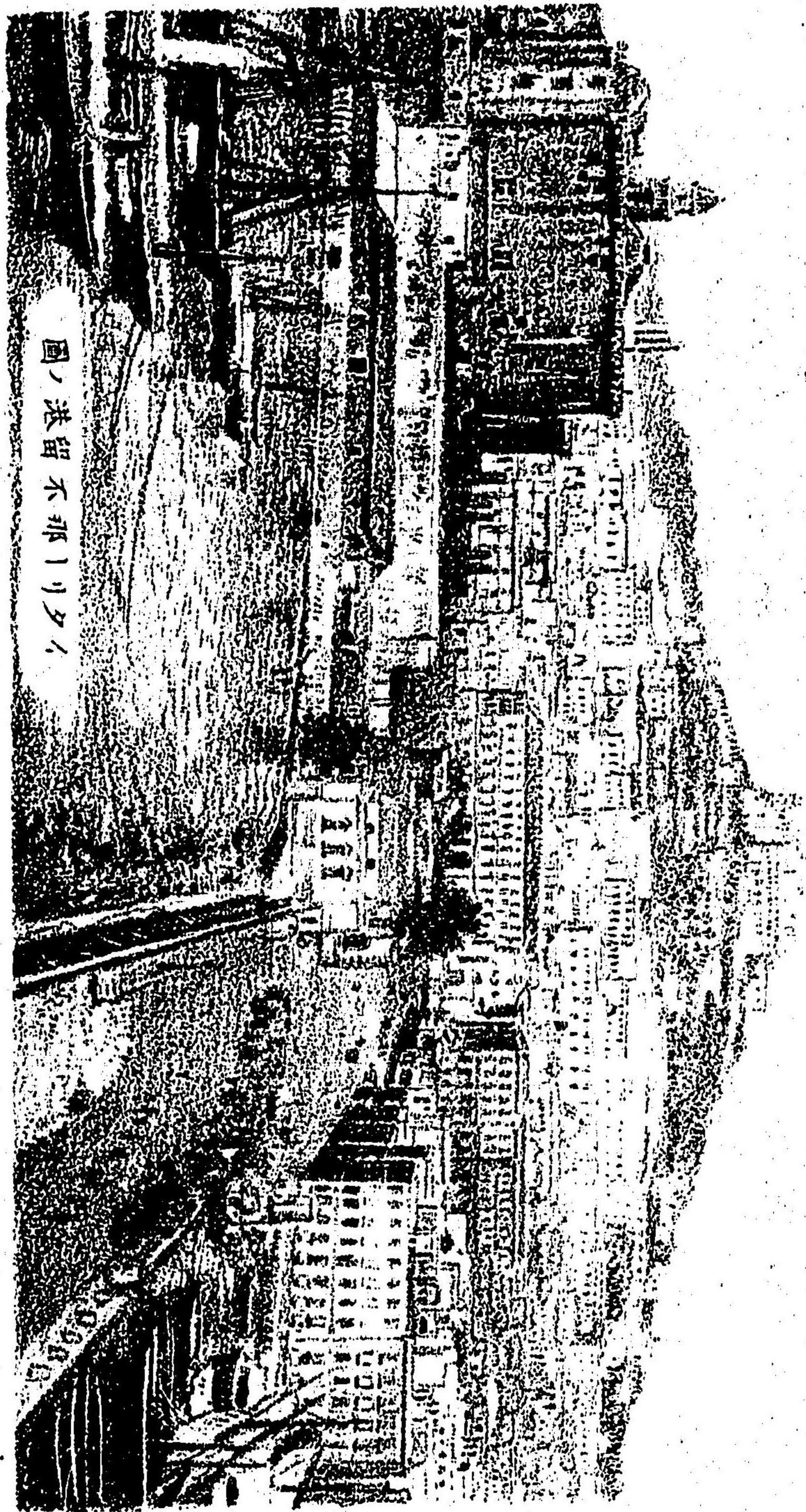
四日 晴朝十八度曉ころより北風つよく波あらうして船の動くことに物の落るおときこゆ起出て甲板に上りて見ればさすかの大船も波にもまれて右に傾き左にくねりて船あしもまどろなり折々波を打入て氣色すさましく見ゆ午後二時頃右にカンダ島に添てすく此島蔭に成て風あき波静まりたれば船中の人々起出て悦ふ此島はトルコの領地にして其流れ百二十里餘あり海岸より山けはしくされど處々に畑もあり村落も見ゆ高山には眞白く雪をいたくきたりやうくく人の住へき國に近つきし心地す夕くれころより風やみ海静なれば島をばなるくもあやみあかるへし

五日 晴朝十九度波風あし終日山を見す

六日 曇朝十八度曉に伊太利亞シ、リトの瀬戸をすくれほろかに見渡せば島のかたに善き港ありメシントンといふ此嶋の府にして家屋も多くありて繁昌の地と見ゆ陸の方にも僅かの市街あり吾國にていはく赤間關に似たりこれを過れば小島散布し陸の方山々かさなりつらありて高き峯には雪をいたくきたり心からとて歐洲の境に入る心地すやうくく沖にむかひてゆく程に左にストロンボレーといふ島を見てすく至て小さき島あれどかたも不二に似たり火山あれば西の方よりうすく烟を吐く麓に人家ありて山の中腹まで畑を耕す誠にけはしき頂より焼土のまあたれちて次第に畑をつふすと見ゆ其さまいとれそろしけ

かり東南のかた峯より海邊まで焼土のすへり落たるを見  
 る午後二時ころはるかに那不留のペグー山を望む四時  
 頃カナレ島をすくカンパチルの岬と相對して瀬戸をみ  
 す此島は斷崖絶壁きり立か如くよほどの絶景あり島中に  
 村落あり處々の絶壁上又は巖窟の際にも家屋あり殊に面  
 白き氣色あり夜六時過る頃那不留港につく此處より上陸  
 する者もさなき人も打交りて陸に行んとて争ふ予は太田  
 氏どかねて此處より上陸する心組あれば荷物とりかた付  
 てやうくに立別れていつ加藤中村氏などは馬耳塞まで  
 行く此處にて別れをつく其折よみておくりけるうた

波風のあらしき中ゆく大船のともにもちきりしことあわ  
 すれそ



圖ノ港留不那一リタム

はしけに打乗て税關も事あくすみて馬車にのりガラント  
ホテルに至りしのはや八時過る頃なりき

書洋行日記後

人生の快樂は其未だ見ざる所を觀其未だ聞かざるものを  
聽き雄都舊京を周遊し其興亡の由來を探り名山大川を跋  
渉し其景勝を探るにあるか得庵鳥尾中將の西するや散士  
頗る之れを羨む未だ久しからず隈山谷中將亦歐米に使命  
するに會し散士其末班に加はるとを得て竊かに期す香港  
に追從せんと到れば早く已に西す當時猶思へらく錫崙嶋  
は佛法の靈地あり先生豈に暫く錫を茲に留めざる勿らん  
やと到れば亦既に西に去る悵悵懷に往來せり其年の仲秋  
澳都の近村に滯留す先生伯林府より來會し同樓に宿し終  
日討疑論辯往々夜半に至る閑われは紅葉を踏み水崖に釣  
を垂れ吟咏亦多し時に勃留峨利亞の亂起り妖雲歐東を覆



ひ山河慘憺の色あり散士先生を勸めて形勢を視んと俱に  
 多惱河を下り句都に入る惡疫流行道路梗塞通せざるに會  
 し恨を抱きて返る繼て先生東より桑梓に歸り散士西より  
 英米を経て歸朝す其間記事頗る多し梓に上せんと欲する  
 久じ唯風塵の中に憔悴し閑人必しも閑あらず荏苒今日に  
 到る今先生に先鞭を着けらる散士之れを讀む未だ蔗境に  
 及ばずして筆を留むるを惜み首を延へて以て後篇の出る  
 を待り

明治二十一年一月 於熱海浴舎 東海散士

版權登錄

明治廿一年九月一日印刷  
 同年九月十日出版

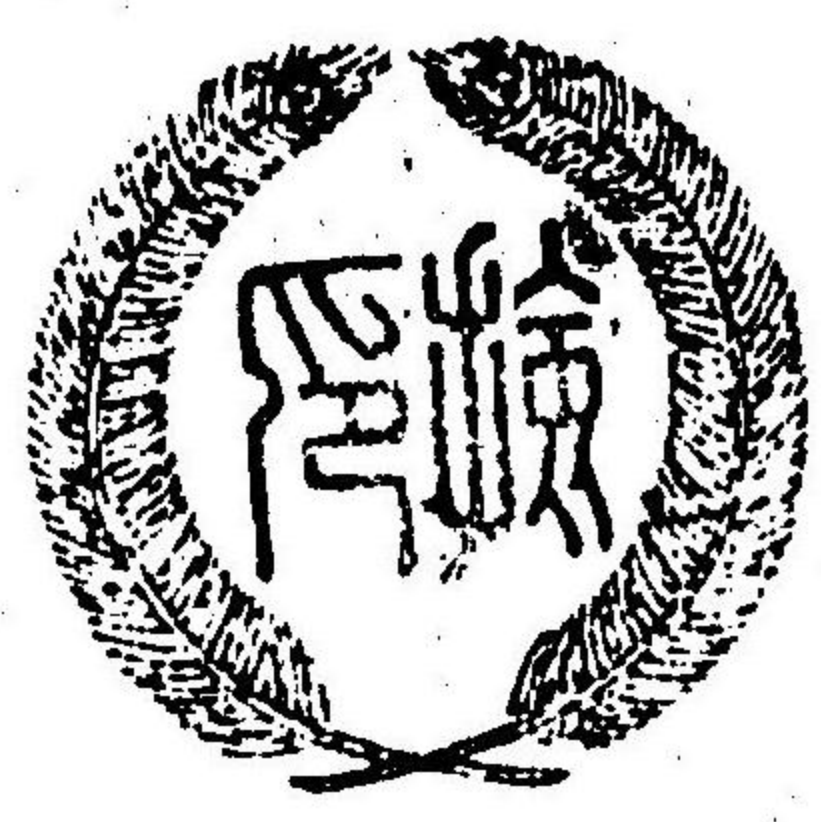
著者 東京府華族 鳥尾小彌太

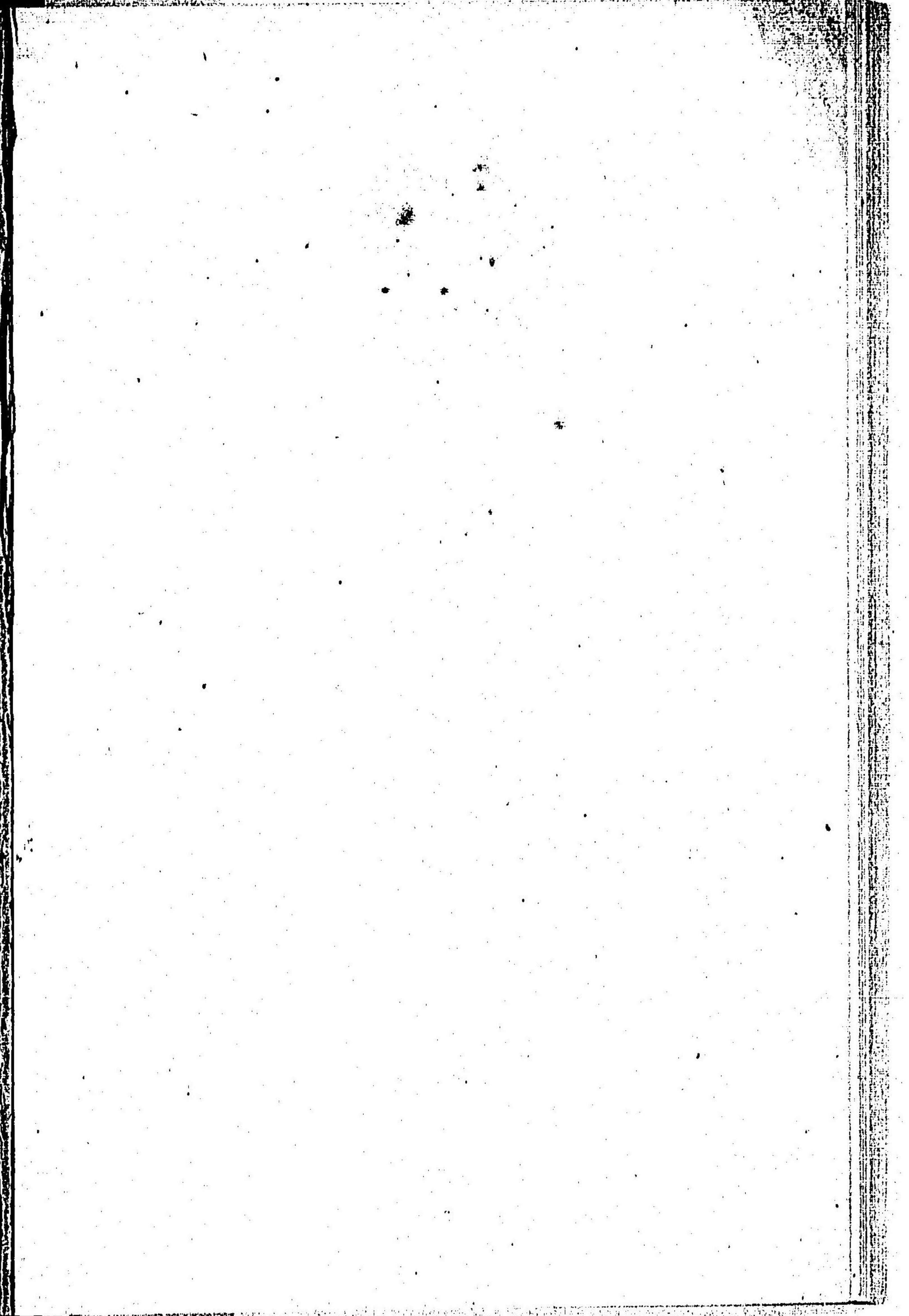
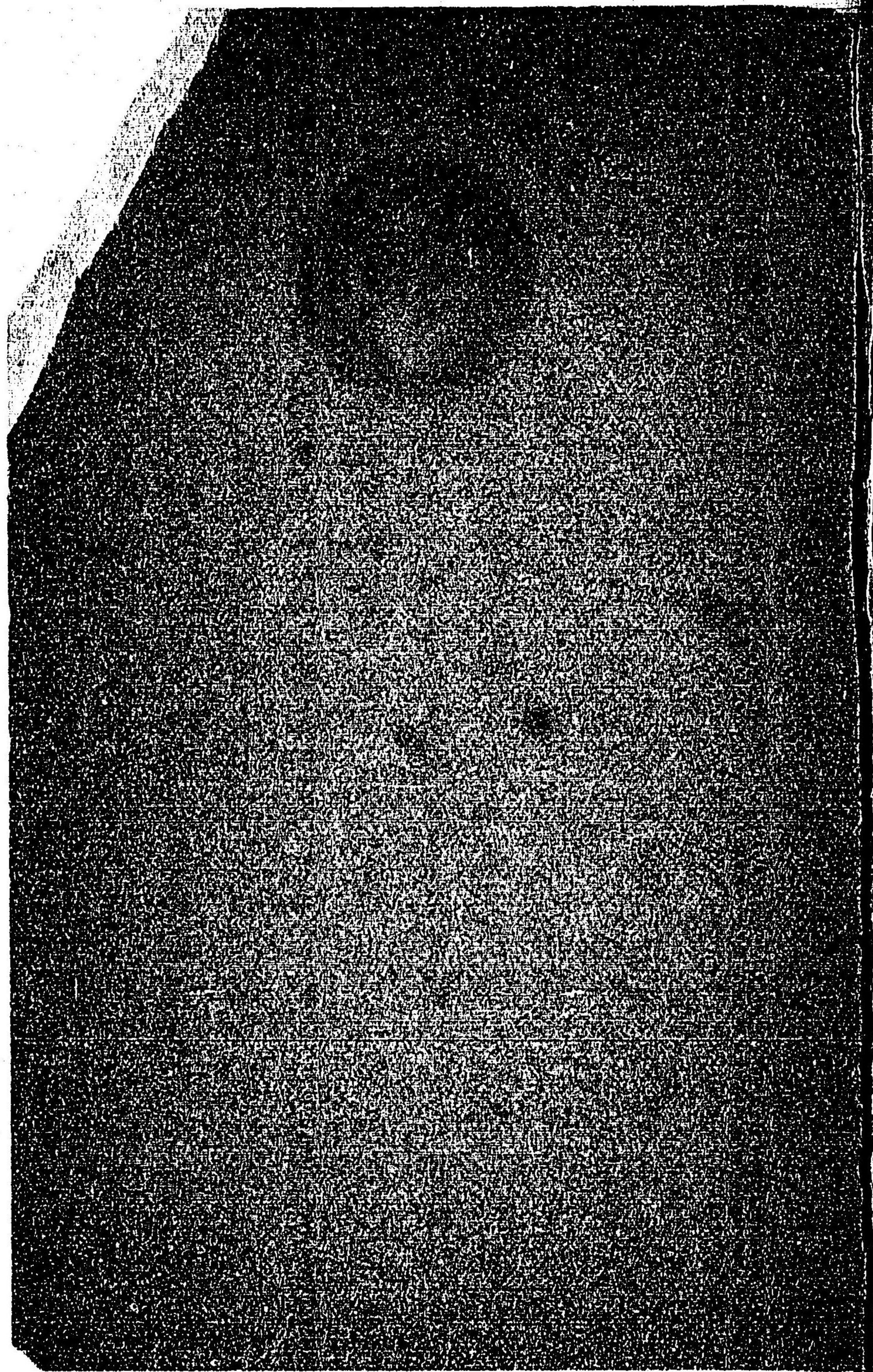
東京府平民 小石川區小石川關口町  
 百九十二番地

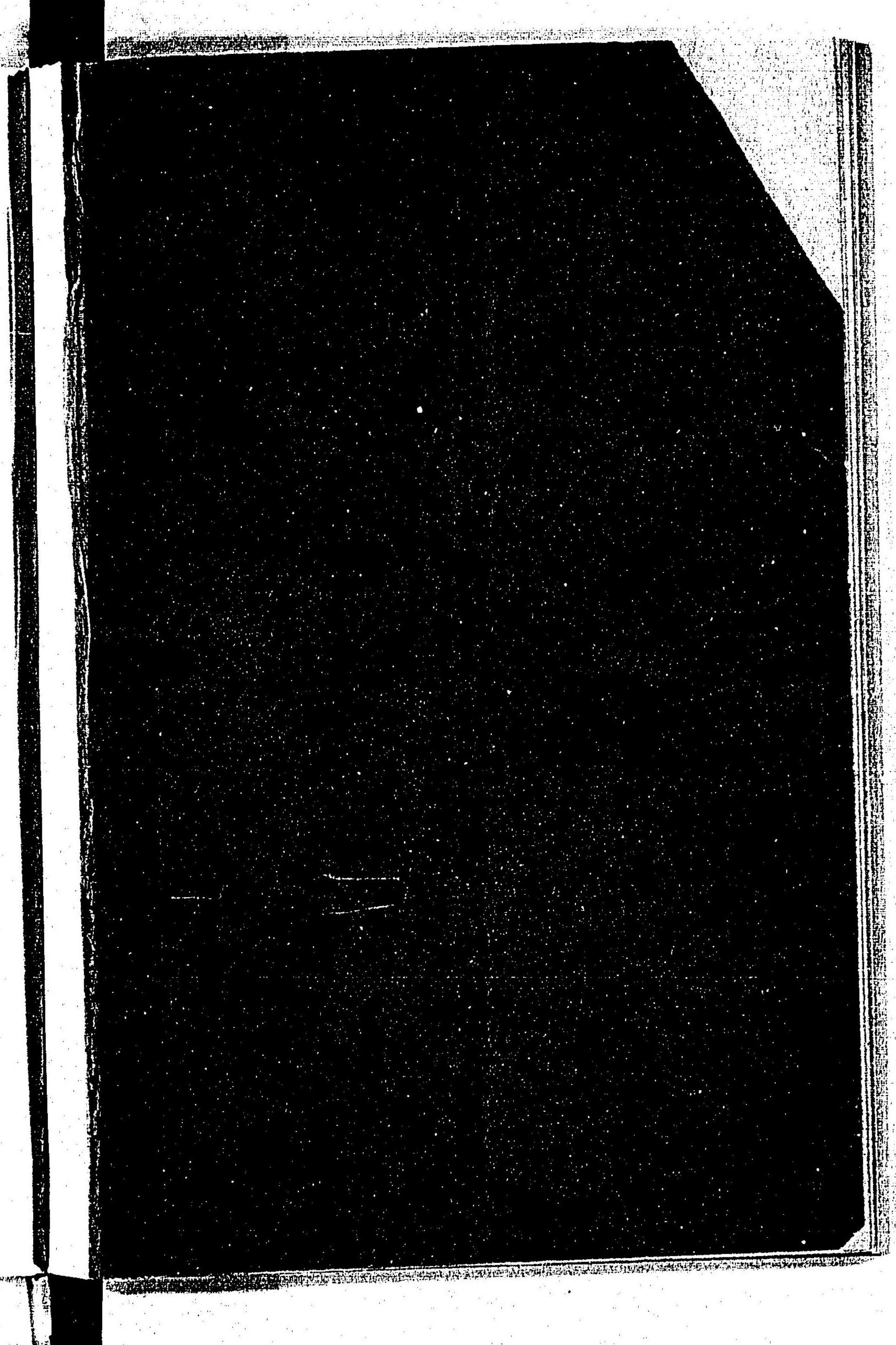
發行者 吉川半七  
 京橋區南傳馬町一丁目  
 十貳番地

印刷者 島連太郎  
 京橋區西紺屋町  
 二十六番地寄留

印刷所 秀英舎  
 京橋區西紺屋町  
 二十六七番地







9  
5

022347-000-6

特29-665

洋行日記

鳥尾 小弥太 / 著

M21

ADA-0903



EX 436

1987

90  
5  
286

1987  
EX 436

1987  
EX 436